

脱青年期を生きる若者とのピアサポ - ト的関わりのプロセス  
- 「愛すること」と「働くこと」の今日的課題 - 論文タイトル

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

キーワード：脱青年期、NEET、ピアサポート、スローキャリア

近年、若者の就職離れが深刻化している。そのため、イギリスの労働政策の中で生まれた NEET という概念が、日本社会においても用いられるようになってきている。本研究の目的は、マクロの視点から「働いている 働いていない」という軸で若者を選別することに対して、それとは異なる視点を提示し、そのうえでこれまで NEET と呼ばれてきた若者への理解と関わりにおいて、臨床心理学が成し得ることの可能性を探ることである。そのために「働いている 働いていない」という軸を外した時に見える、昨今の若者の生態を詳細に記述しようと試みた。データ収集においては、幼なじみの友人 A (大学卒業後約 1 年ほど、半引きこもり状態) に対して、合計 3 回のインタビューを実施した。またインタビューを挟んだ約 5 ヶ月間に渡る関わりの中で、電話をしたり実際に会って遊んだ際のやり取りもまたデータとして活用した。

結果としては、まず第一にインタビュアー自身が A を何者と認識して会うのかによって、得られるデータとその解釈は相当に異なることが分かった。研究開始当初は、A に対して「特異なキャリアを生きる同年代の若者」という枠組みを当てはめていた。そのため、その文脈に沿ったデータが抽出され易かった。しかしながら、その枠組みでは解釈しきれないデータがあり、次の 2 回目のインタビューでは「NEET」という枠組みによって、A の生きている現実を理解しようとした。そして、それによって一応の解釈がなされた。また、インタビュー後に行った電話でのやり取りから、A が近いうちに就職に向けて動き出すであろうことが予想されたため、当初研究はそこで終了する予定であった。ところが、その後再び A と会った際に、これまで立ててきた仮説が全く正しくなかったことが確認された。そのため、それまでに得られた分析結果を再度検討し直したところ、インタビュアー自身の「働いている 働いていない」という枠に対する囚われが、A の生きている現実を恣意的に意味付けていたことが分かった。

3 回目のインタビューでは、こちらが予め仮説を同定することなく、A 自身による自分の生きている現実への意味付けに注目した。するとインタビュー終了後に、A はこれまで決して語ることのなかった幼児期の母子関係、及び双子の姉との関係における葛藤について語った。その話をもとに再度分析を行ったところ、A が今働くことに向かっている背景には、「母親への独占願望」「姉との比較対象からの逃避」「同年代との競争の回避」という 3 つの主たる要因が見出された。結局のところ、NEET という枠組みを外した時に見える A の現実には、「脱青年期」(延長された青年期)の発達課題の克服というテーマに抽象されるものであった。

今回 A と筆者が創り上げた関係性は、ピアサポートの関係性であった。インタビューの触媒的な作用によって、語る A 自身が少なからず自分というものを見つめ、気づきを得てきた。また A だけに留まらず、話を聞く筆者の側も変化を起こし、それによってまた A も影響を受けるという相互作用がそこにはあった。それが可能だったのも、A と筆者の 2 人が、同じように葛藤を抱えながら「脱青年期」を生活している若者同士だったからである。

本研究では、「脱青年期」を生活する若者との関わりを生活する場合、今回 A と筆者が結果として行ってきた、ピアサポート的な関わりが有効であるという結論を出した。今後はコミュニティの中で、若者同士がピアサポート的に関われる場を構築していくことも、社会に開かれた臨床家の新たな活動領域となっていくであろう。